

図書館は燈台のように立っていた！～原発災と『としょかんの TOMO』～

顧問 菅野 清二

1. 原発爆発時の混乱

2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9というとんでもない地震が発生した。南相馬では震度6弱～6強、地盤によっては震度7の激しい揺れが長い時間続いた。庭が地割れして家が倒壊するのではないかと思うほどだったが、そうなる前に何とか地震は治まった。経験したことのない凄惨な地震だった。一体どういう事なんだろう？この地震は！と思った。夕方になって、大津波が沿岸部を襲ったことを知った。妻の母を避難所から引き取って来て、津波の詳細を知り愕然とした。



次の日、3月12日午後3時30分、福島第一原子力発電所の1号機が爆発した。そして、他の原発も制御できない状態だという情報を得た息子の意見に従い、三春に居る妹の所に取り敢えずの着替えぐらいを持って避難した。県道川俣線は難なく走れたが、114号国道は物凄い車の数で、信号の消えた道をのろのろ走った。三春に着いたのは12時頃だったが、携帯も繋がらず飛び込みだった。3月14日3号機爆発、2号機放射能噴出と、原発はとんでもない状態に陥り、三春は富岡・大熊・葛尾などからの避難者で溢れていた。

2. 人気のない街に図書館はしっかりとあった

3月18日、二三日と思っていた避難が長引きそうなので、餌と水を置いたまま繋ぎっぱなしにしてきた飼い犬が心配で家に帰った。途中飯館村で20台近くのバスとすれ違った。後で分かった事だが、これが原町区からの最後の集団避難だった。バスに片品村という表示がしてあったのを覚えている。ぼく達の前に、初めて見る戦争に使うようなごつくて足の高い自衛隊の車両が走っていた。家に帰る筈なのに異界に突き進むような怖い感じだった。犬は親戚からも餌を貰って生きてはいたが、目がとろんとして元気が無かった。でも、取り敢えず犬が生きていたことにほっとして、街の様子を見に出かけた。市役所は逃げ出さずに頑張っているようなので、まず、ほっとした。向かいの市民会館の前には自衛隊の車が止まっていて中には人の姿も見えるので、ここの建物も大丈夫だったんだ、と安心した。それから旧国道を右折して駅通りに向かった。人の姿は全然見なかった。見たのは、離れた先を走る軽自動車一台だけだった。住み慣れた街なのに異様に静かで人気もなく、悪い夢を見ている様だった。この街はこれからどうなっていくのだろうと凄く不安な気持ちになった。

その時である！ぼくの目に図書館の建物が飛び込んできたのだった。勿論、図書館は開いてはいなかったが建物はしっかりと建っている。この分だと蔵書も大丈夫だろう…。そう思うと、さっきまで沈んでいた心に灯し火が点ったように思った。

南相馬市は15日に、20キロ圏内に入る小高区と原町区の一部は人が住むこと

ができない警戒区域に、30キロ圏内の原町区の残りと鹿島区の一部が避難準備区域に指定されていた。だから、これから南相馬市に住む人は放射能汚染地域に住む人として見られることは間違いない。そして、人口も減るだろう。現に街の中は人が居なくなって空っぽなのだ。辛い、悔しい、悲しい…そう思った時に、図書館に会ったのだった。その時、ぼくは「大丈夫だ。この街がどうなろうとも、なんとわれようとも！誇りをもって生きていける!!」と強く思ったのだった。これからこの街からいろんなものが無くなって行くだらう。しかし、図書館と市民文化会館は残った。文化の二本柱は残ったのだ。この文化の二本柱を拠り所に、南相馬市の市民はたとえ傷ついても誇り高く暮らして生きていけると思ったのだ。いわゆる「ぼろを着てても心は錦」という心境になれたのだった。

3. 図書館の再開を陳情する

ぼくは、35日間妹の所に世話になって、4月16日に家に帰った。その頃は放射能についての知識も少しは付いていたし、南相馬から避難してる人も居る福島市の方が放射線量が高いことも知っていたので、帰ることに躊躇は無かった。しかし、市役所では放射能を怖がって辞める人、当たり所のない市民の怒声に傷ついて辞める人などがあって、人手不足になり、図書館の正職員も館長を除いて図書館以外の部署に吸い上げられてしまったのだ。しかし、このまま閉館を続ければ、町に残った人、帰還した人の文化的な楽しみが無くなってしまい、この街に住む魅力も無くなってしまおうと考えた。そこで、『としょかんの TOMO』では、鎌田代表を中心に役員が集まり、5月28日には教育長、29日には市長と副市長に図書館の早期再開を要請したのだった。



*この図書館は〈市民の宝〉であると同時に、我々〈『TOMO』の宝〉でもある。駅前に図書館が新設されるまで、原町の図書館は複合施設である文化センター4階にあった。だから、「館」というよりは「室」だった。もっとしっかりした図書館が欲しいというのが市民の願いだった。それを受けて当時の図書館協議会のメンバーが中心になり「図書館友の会」として立ち上げたのが『としょかんの TOMO みなみそうま』なのだ。ぼくも図書館に協力して読み聞かせをそこでやって、子ども達を図書館に送り出していたから、立ち上げの時に誘われて今に至っているわけである。

さて、そこから『TOMO』は図書館新設の陳情をするだけでなく、よりよい図書館を作るべく、視察を中心とした勉強をしたのだ。県内では福島市・郡山市、宮城県の泉図書館と県立図書館、茨城県の笠間市・守谷市、埼玉県寄居町・小川町・鶴ヶ島市、千葉県の浦安市などの図書館を視察してその成果を建設検討委員会や設計コンペに生かし、今の図書館が出来たのだ。勿論、その為には、市民の声を聞きながら図書館や文化会館の建設を進めてゆくという、この市の民主的な事業の進め方に与かるところも大いにあると思う。それにしても、『TOMO』の頑張りはずごいと思う。その頑張りの成果が中央図書館であり、〈『TOMO』の宝〉でもあるのだ。*

こうした陳情の結果、2011年8月9日、時間制限付きだが中央図書館は遂に再開したのだった。ぼくはこれで街に大きな灯りが点いたと思った。図書館が再開することで人々が「この街に住んで良かった」と思うようになって欲しいと思った。9月30日に避難準備区域の指定が解除され12月6日には鹿島図書館が再開した。小高区は警戒区域だった為再開は2016年7月になった。



もう一方の柱、文化会館は、自衛隊が撤収し会館の修理が終わった 2012 年 1 月に再開した。これで、南相馬市原町区の文化の両輪が再び回り始めたのだ。

4. 再開後の初めてのお話会



2011 年の 12 月、再開後初めてのお話会を図書館でやった。梶田さんとぼくは「何人の子どもが来るかな？」とわくわくしながら待っていた。結局子どもは一人その子のお母さんがひとり来ただけだった。終わってから梶田さんと「この一人から段々に図書館に来る子どもが増えてゆくよう…心を込めて読み聞かせをして行こう！」と話し合ったのだった。街には、子どもと若い人が減り、年配の人の割合が多くなった。この現実をしっかりと踏まえて南相馬は復興の道を歩まなくてはならないのだ。

5. 『TOMO』の皆さん！図書館をもっと応援しよう！！

鎌田代表、事務局長や役員の皆さんを中心に『TOMO』の活動が長い間続いていることは、素晴らしいことだと思う。今、高齢化と少子化が進み、若い人が減少しているのは全国

的な傾向だが、被災地の南相馬ではそれが随分早く進んでいるように思う。

それでも、図書館の賑わいを取り戻す対策はあると思う。それは、TOMO の皆さんが友人達や子供・孫を誘って、月に 2～3 度は図書館を利用することである。必ずしも本を借りなくても、新聞や雑誌を読んだり、或いは本の匂いを嗅ぎながら館内を散歩するだけでも良いと思う…。

まもなく中央図書館は 10 周年を迎える。

この記念すべき年度に際し、『TOMO』と図書館の関係を振り返って、図書館に向向いて、それぞれの楽しみを見つけてみては如何だろうか。

